

一般社団法人 岩の力学連合会
平成 30 年度・第 4 回理事会 議事録

日時	平成 30 年 3 月 15 日 (金) 10:30-14:15	場所	資源・素材学会会議室
----	----------------------------------	----	------------

理事会	理事長	新 孝一	○	理事	奥野 哲夫	×	理事	西村 強	○
	副理事長	岸田 潔	○	理事	清木 隆文	○	理事	芥川 真一	○
	幹事長	岡田 哲実	○	理事	森岡 宏之	○	理事	長田 昌彦	○
	理事	谷 和夫	○	理事	児玉 淳一	○	理事	下田 直之	×
	理事	小山 倫史	×	理事	伊藤 高敏	○	理事	横尾 敦	○
	理事	齋藤 禎二郎	×	理事	佐藤 晃	○	理事	上田 日出男	○
	監事	西本 吉伸	○	監事	細野 高康	○	ISRM 役員	清水 則一	●
	オブザーバー	安原 英明	●	オブザーバー	藍檀 オメル	×	オブザーバー	尾留川 剛	○

敬称略順不同, ○: 出席, ×: 欠席, ●: スカイプ出席

配 付 資 料

資料番号	頁	資 料
資料 30-理 4-01	1	平成 30 年度・第 3 回理事会 (書面審議) 議事録 (案)
資料 30-理 4-02	2	平成 30 年度・第 3 回常任理事会議事録 (案)
資料 30-理 4-03	8	会員の入退会
資料 30-理 4-04	10	代議員選挙の開票結果
資料 30-理 4-05	11	平成 30 年度事業報告 (案)
資料 30-理 4-06	19	平成 30 年度決算 (案)
資料 30-理 4-07	21	平成 31 年度事業計画 (案)
資料 30-理 4-08	24	平成 31 年度予算 (案)
資料 30-理 4-09	28	Rock Dynamics2019 について
資料 30-理 4-10	37	YSRM&REIF2019 について
資料 30-理 4-11	108	編集委員会
資料 30-理 4-12	112	連合会賞選考委員会
資料 30-理 4-13	121	賛助会員特別会議
資料 30-理 4-14	154	定款の改定について
資料 30-理 4-15	156	岩盤工学基礎講座のアンケート結果
資料 30-理 4-16	160	国立大学教育研究評価委員会専門委員会及び 機関別認証評価委員会専門委員会委員の候補者の推薦
資料 30-理 4-17	162	公益財団法人日本学術協力財団からの要請
資料 30-理 4-18	167	第 16 回日本学術振興会賞受賞候補者の推薦
資料 30-理 4-19	170	ISRM 14th International Congress 査読について

【議 題】

- 平成 30 年度 第 3 回理事会 (11/9 書面会議) 議事録の承認* (岡田) 資料 30-理 4-01
修正なく議事録は承認された。
- 平成 30 年度 第 3 回常任理事会 (1/11) 議事録の確認 (岡田) 資料 30-理 4-02
議事録の確認が行われ, 以下の質疑があった。
Q. ISRM 主催の国際会議において他学会との共催が可能になったこと等はネット上に掲載されているのか。
A. 改定された新しい ISRM Statutes, By-Laws が既に掲載されている。
- 会員の入退会の承認* (岡田) 資料 30-理 4-03
会員の入退会の名簿の紹介があり, 退会を希望している次の 3 名の慰留を行うこととなった。
・細井氏 (株式会社ジオ・ソリューション) : 横尾理事
・池見先生 (九州大学) : 岡田幹事長が三谷先生に依頼
・吉田氏 (山口大学) : 清水 VP が中島先生に依頼

その他の2名の入会と10名の退会については承認された。

4. 代議員選挙結果の報告（森岡） 資料 30-理 4-04
代議員選挙の結果、候補者全員が信任されたことが報告された。特に質疑はなかった。
5. 国際シンポジウム YSRM&REIF2019 について（安原） 資料 30-理 4-10
YSRM&REIF2019 の準備状況（寄付金の状況、予算書、イベントの内容等）が紹介された。特に質疑はなく、紹介の内容については了承された。
6. 国際シンポジウム Rock Dynamics2019 について（清木） 資料 30-理 4-09
Rock Dynamics2019 の準備状況（論文総数、スケジュール、予算書等）が紹介され、以下の質疑があった。

Q. 基調講演者に謝金は払わないことになったのか。

A. そのとおりである。事務局とも相談し、謝金の形ではなく、参加費の免除とホテルの確保という形で支出することとした。

Q. アブストラクトの出版費が以前の予算書と比べて増額しているようであるがなぜか。

A. 以前は数が30人であったが、現在は参加者全員に配布することを想定しており、195人と増えている。

以上より、紹介の内容については了承された。

7. 平成30年度事業報告・決算案の確認、基金使用の承認※（岡田） 資料 30-理 4-05,06
平成30年度の事業報告および決算案が紹介行われ、以下の質疑があった。

Q. 決算書の YSRM の科研費が予定どおり入っているが、増減が0になっていないのはなぜか。

A. ミスであるので、修正する。

Q. 予算が約300万円のマイナスで、当初見込んでいなかったロックダイナミクスの収入が410万円あったとしても、決算が約400万円のプラスになるのはなぜか。

A. 予算にあった基金が予定ほど使用されなかったことに加えて、基金から一般会計への繰入金もまだ計算されていないためと考えられる。

Q. 概ね予算どおり使用されたということか。

A. 基金の使用が予定した額より少ないので、その分がプラスになると思われる。

Q. 事業報告の1ページ目にある事業概要(2)の最初に平成29年度という記載があるが、平成30年度の誤りか。

A. その通りである。修正する。

Q. 元号と西暦が混じっているが統一した方がよいのではないか。

A. 例年の記載に倣い、混じったままになっている。西暦に統一したい。

Q. 基金の基本財産増減決算で金額が約100万円になっているが、約1000万円の誤りではないか。

A. その通りである。修正する。

Q. 通帳も一度確認した方がよいのではないか。

A. 来月予定されている会計監査において確認の予定である。

Q. 基金から一般の口座に繰り入れると決算の数字がかなり変わることになる。つまり、収入側と支出側に基金の使用額が入るので、基金に関する収支は0になると考えてよいか。

A. その通りである。

Q. 国際シンポジウム Rock Dynamics2019 の予算が今年度の収入に入っており、来年度については、その分がマイナスになる。経理と相談して、繰り越しや未払い分等の項目を作るなどして、年度毎にわかりやすく記載した方がよいのではないか。

A. 年度をまたぐ収支があるので、実態が見えにくくなってしまふ。ただし、予算書の内訳書には2つの国際シンポジウムの予算を個別に記載することになるので、実態が全くわからなくなるわけではないと思う。会計監査が4月25日に実施されるので、どのような記載とするのがよいか経理とも相談しながら決算書を精査していきたい。

Q. 事業報告の16ページの上から3行目に岩の力学ニュースのバックナンバーの公開と準備という項目があるが、準備は既に終了しているので削除した方がよい。

A. 実際はまだ公開されていない。公開を総会までに進めてもらい、準備は削除したい。

Q. フロンティア賞受賞者の所属が（所属なし）と記載されているが、元熊本大学大学院などに修正した方がよいのではないか。

A. 賞選考委員会より、記載方法について本人に何うようにしたい。

Q. 総務委員会の規則関係の部分が削除されているが、定款の修正を総会で提案するので、修正を提

案のような記載をしてはどうか。

- A. 承知した。
- Q. 賞選考委員会のところで、賛助会員の表彰制度を議論したことを記載した方がよい。
- A. 承知した。
- Q. 電子ジャーナル委員会のところで、ISRM Congress 2019 Abstract の国内査読を行ったことが記載されているが、本論文の査読も始まるのであれば、記載した方がよい。
- A. 本論文の査読が5月までに実施されるのであれば記載することにしたい。

以上のとおり、平成30年度の事業報告および決算案については指摘の箇所を修正することで了承された。また、基金から一般会計への繰り入れが承認された。

8. 平成31年度事業計画・予算案の承認※ (岡田) 資料 30-理 4-07,08
平成31年度の事業計画および予算案が紹介行われ、以下の質疑があった。

- Q. 平成31年度はYSRM&REIF2019が開催されるので、国内の若手研究者会議は実施しない計画でよいか。
- A. よい。ただし、次々年度は開催する予定なので忘れないように項目として残してほしい。
- C. 予算は0であるが、基金のところに項目として残すようにする。
- Q. 火山の国際シンポジウムが平成31年度からスタートするのでその予算が必要ではないか。
- C. 事業計画に記載されているので予算化しておいた方がよい。
- A. 交通費・会議費として国際会議準備基金から50万円を計上することとしたい。
- Q. 事業計画の6に国際会議開催の準備とあるが、国際会議の開催と準備とはどうか。
- A. そのように修正する。
- Q. 各委員会 (P.24) の予算の編集委員会の旅費に東京都内9名、栃木1名等の記載があるが、毎年どこから参加するかは変わるので、RockNet委員会のように、4回分という記載にした方がよい。
- A. そのように修正する。電子ジャーナル委員会についても同様に修正したい。
- Q. 事業計画 (P.22) で電子ジャーナル委員会のみ、委員会の開催が項目として記載されている。他の委員会の記載と揃えた方がよいのではないか。
- A. 委員会の開催は項目として消すことにしたい。
- Q. 基金の利息 (P.25) について、例年同様の金額 (500~1500円) が記載されていると思うが、現実的な金額 (100円程度) に修正した方がよいのではないか。
- A. そのように修正する。
- Q. 事業計画および予算に ILC 研究企画特別委員会のことが記載されているが、文部科学省からネガティブな発表があったのではないか。
- A. 文部科学省の表現はネガティブではなく、正式な参加表明は行わなかったが、継続的に協議を行うというものであった。よって ILC 研究企画特別委員会についても活動を続けていくべきである。
- C. では、ILC 研究企画特別委員会についてはこのままの記載としたい。
- Q. 正味財産増減予算書内訳書 (P.26) の2019RDSの広告料収入に前年度の510万円が記載されているがよいのか。
- A. これは間違いである。前年度に記載されているので、ここから除く必要がある。修正する。
- C. 予算については、平成30年度の決算が確定した段階で修正が入ることになるが微修正であるので、本日出た意見を修正することで、承認していただきたい。

以上のとおり、平成31年度の事業計画および予算案については指摘の箇所を修正することで承認された。

9. 委員会審議・報告事項

- 1) 編集委員会 (谷) 資料 30-理 4-11
1/21に開催された編集委員会の概要と岩の力学ニュース131号のコンテンツが紹介された。特に質疑はなかった。
- 2) 国際技術委員会 (横尾) 資料なし
若手の海外助成が募集中であるが、今のところ応募は0であることが報告された。特に質疑はなかった。
- 3) 電子ジャーナル委員会 (児玉) 資料なし
特に報告はなかった。

4) Rock Net 委員会 (岡田)
特に報告はなかった。

資料なし

5) 連合会賞選考委員会 (岸田)

資料 30-理 4-12

論文賞, 技術賞, フロンティア賞, 博士論文賞選考委員会内規の修正を行ったことが報告された。また, 次年度の博士論文賞の募集が行われていること, 今年度の論文賞, 技術賞, フロンティア賞が決定したことが報告された。以下の質疑があった。

Q. 賞選考委員会報告 (P.119) に, 何件の応募があったかを記載した方がよいのではないかと。

A. 承知した。

Q. 博士論文賞の募集要領 (P.115) の「2. Rocha メダルについて」の3行目に, 「めいめい」がひらがなになっているので, 漢字に修正した方がよい。

A. 修正する。

次に, 賛助会員表彰の検討結果について説明が行われ, 以下の質疑があった。

C. 賛助会員表彰については反対である。理由は, 賛助会員を増やすことが目的だとすると, 表彰は効果がないと思うからである。昨年, 2社の勧誘に成功したが, 口説き文句は, ILC 委員会等の情報が入ってくるということと, 大学の先生方のキーマンと会えるということであった。実際, 講演会付きの懇親会の席で, 新賛助会員から「いろんな人と知り合えてとてもよかった」という感想をいただいた。つまり, 賛助会員の増加に最も効果があるのは, 情報と人脈である。賛助会員表彰はそれにかかるマンパワーに比べて便益が少ないと思う。

C. 地盤工学会にも永年表彰があるが, 中規模以上の会社では表彰をもらってもどこに置いていいかわからないとか, 表彰は必要ないという意見があった。表彰にマンパワーをかけるのであれば, 若手とか, 将来の人たちのために検討を行った方がよい。

C. 賛助会員特別会議でも賛助会員表彰は不要との意見があった。つまり, 賛助会員表彰は賛助会員特別会議の総意というわけではない。その一方, 賛助会員表彰があっても, マイナスの効果にはならない, 1つのインセンティブにはなるという意見もあった。

C. 賛助会員の技術賞とか, プロジェクト賞など, 賛助会員が応募しやすい賞を作る方向もあると思う。

C. 賛助会員表彰を行わないのであれば, 別途, 賛助会員を増やす方を理事会として出すべきだと思う。また, 今は景気がいいので, 我々理事が勧誘のため汗をかければ賛助会員は増えると思う。そのような努力をすれば, 賛助会員特別会議も納得してくれるのではないかと。

C. 賛助会員の勧誘のためには, 講演会や講習会などのサービスの充実が必要である。

C. 賛助会員向けの懇親会付きの講習会を増やしてはどうか。

C. 表彰制度については, 若手の賞を今後検討してほしい。

Q. 賛助会員が応募しやすいプロジェクト賞のようなものも検討した方がよいかと。

A. プロジェクトは発注者と一緒に出すことになるため, 発注者の了解や他の学会表彰との調整が必要なので面倒である。土木学会のプロジェクト表彰は大きな価値がありその労力を厭わないが, JSRM では応募しようと思う企業は少ないだろう。

C. 電子ジャーナルの賞を作ってもよいのではないかと。賞を作れば投稿が増えるのではないかと。

以上より, 今回は賛助会員表彰を見送り, 賛助会員を引き留め, また増やすための講習会などの他の方法を検討していく方針となった。

6) 総務委員会 (岡田)
特に報告はなかった。

資料なし

7) ILC 委員会 (横尾)
特に報告はなかった。

資料なし

8) 賛助会員特別会議 (尾留川)

資料 30-理 4-13

賛助会員特別会議の活動報告と提言が紹介され, 以下の質疑があった。

C. 提言の2つ目の岩盤工学技術者の育成については, 講習会も始まって少し動き出しているが, 提言の1つ目の岩盤工学に関する情報共有の充実については現状では不足している。これを充実させるためには, 受け皿となる委員会が必要である。

C. 提言の3つ目の賛助会員の増加による連合会の活性化については, 賛助会員表彰の議論のとおり, 理事が最低2社に声をかけるなど, もっと積極的に行っていくべきである。

- Q. 提言の中の賛助会員特別会議の継続については、どのように対応していくのがよいか。
- A. 賛助会員特別会議は特に時間を区切って活動をしている訳ではないが、現時点では位置づけが曖昧である。連合会規則の中に、常設委員会と企画特別委員会が規程されており、賛助会員特別会議の主要メンバーで構成される運営企画特別委員会が企画特別委員会として位置づけられている。
- C. 賛助会員特別会議に関する来年の予算が承認されたので、継続が承認されたと理解してもよいのではないか。
- C. 規則の改定が必要であるが賛助会員特別会議を常設委員会にした方がよいのかもしれない。
- C. 常設委員会にするなら、特別を抜いて賛助会員会議とした方がよい。
- C. 賛助会員の立場として、ある程度の期間の継続が決まっているなら、個人任せではなく、委員を引き継ぐことも検討することになる。
- C. 今後1年間、賛助会員特別会議を常設委員会とする検討を運営企画特別委員会で検討してはどうか。
- Q. 運営企画特別委員会の予算では、講師の交通費、謝金、会議室使用料しか計上していないが問題ないか。
- A. 旅費がかかる委員はいないので問題ない。

以上より、今後1年間、賛助会員特別会議を常設委員会とするための検討を運営企画特別委員会で検討していただくこととなった。また、岩盤工学に関する情報共有の充実と賛助会員の増加による連合会の活性化については、今後も理事会で継続して検討することとなった。

10. 定款の改定について（岡田）※

定款の改定内容について紹介があり、特に質疑はなかった。よって、改定案は承認され、総会の議案とすることとなった。

11. 岩盤工学基礎講座について（岡田）

資料 30-理 4-15

岩盤工学基礎講座の全5回が終了し、非常に好評であったことと、各講座修了後のアンケートの結果が紹介された。

- C. 参加者から、今まで地質の授業を受けたことがなかったので今回の企画はよかったという意見をいただいた。同じ内容であればまたやってもいいと考えている。
- C. 講座の内容の授業をやっておらず、このために今回資料を作成したので疲れた。
- C. 受講者がちゃんと聞いてくれたのでよかった。時間が短いという意見が多かった気がする。各講義を別々に実施したのがよかったかどうか気になる。また、交流という意味では、午前よりも午後や夕方などの方がよかったかもしれない。
- C. たいへん好評であったので、今後も継続して実施した方がよい。
- Q. 講師を理事会メンバーではなく、外部から招くことも考えられるのか。
- A. 講師の謝金等の予算をとってないので、理事の先生方をお願いすることになると思う。次年度予算で講師の交通費は計上している。
- C. 岩盤工学基礎講座ということであれば、講師をできる人がある程度決まってくると思うので、外部の人に頼める余地も残しておいた方がよいと思う。
- C. 基礎講座ということだったが、若手ではなくベテランの人が1名参加しており、やりにくかった。
- C. 講義をしてみて面白かった。講義のやり方として、大学のゼミみたいな形式がよいのか、講義の形式がよいのか再検討した方がよい。参加者は実務経験のある方が多いので、参加者の希望が事前にわかるなら、もっと望んだ内容に集中したゼミのようなものができるのではないかと思う。
- C. 今回の5人の講師の講義資料を集めると、岩の力学のテキストシリーズができるのではないかと思う。
- C. 今後、基礎講座については、総務委員会で企画し、理事会に諮る方向がよいと思う。
- C. これまでの講習会は会場を予約して、講演内容を精査して、何度も募集をかけて、そして収支を計算して、といった大変な労力がかかるため、年に限られた回数しか開催できなかった。今回は、そのようなものではなく、こじんまりした人数で、大学の先生が自分のやっている教材を使って、気軽に、そして回数を増やしてできるのが最大の特徴。つまり、デパート講習会じゃなく、コンビニ講習会みたいなイメージである。開催の回数を増やすことで活性化した方がよい。夕方、ビール付きでやってみるとか、自由に楽しみながら色々試してみてもどうか。
- Q. 今期の理事の間（5月31日まで）に、もう何回か開催した方がよいか。
- Q. 今回の講義と同じ内容であれば実施することは可能か。
- A. 同じでよいなら可能である。
- C. 現理事会の任期である5月末に限定せず、企画すればよい。

以上より、継続して岩盤工学基礎講座を開催する方向で調整することとなった。

12. その他

1) 副総裁選のノミネーション (新)

資料なし

岸田副理事長が副総裁選に立候補することが紹介された。特に質疑はなかった。

2) 国立大学教育研究評価委員会専門委員会及び

機関別認証評価委員会専門委員会委員の候補者の推薦について (新)

資料 30-理 4-16

候補者の推薦を行ったことが紹介された。特に質疑はなかった。

3) 公益財団法人日本学術協力財団からの要請について (新)

資料 30-理 4-17

日本学術協力財団の団体賛助会員加入の要請があったことが紹介された。特に質疑はなかったが、加入には1口50000円が必要であることから、加盟しないととなった。

4) 第16回日本学術振興会賞受賞候補者の推薦について (新)

資料 30-理 4-18

日本学術振興会賞受賞候補者の推薦があれば情報をいただきたいということが紹介された。特に質疑はなかった。

5) ISRM 14th International Congress 査読について (岡田)

資料 30-理 4-19

ISRM 14th International Congress の論文本文の査読について、継続して電子ジャーナル委員会で担当していただくことが確認された。

6) 会員管理システムの不備について (新)

会員管理システムに不備があり、9名ほどの会員から会費を二重に請求していたこと、その方々についてはお詫びの連絡を行ったこと、二重にいただいた分については2019年度に振り替えたことなどが紹介された。また、2年以上の会費未納者が20名程度おり、現段階では特段の手を打っておらず、今後、具体的な対応方法について検討が必要であることが紹介された。特に質疑はなかった。

13. 今後の予定

今後の予定について、業務・会計監査が4月25日10:00-12:00に開催されることが紹介された。また、平成31年度第1回理事会を5月14日もしくは5月15日に開催することとなった。

※決議・承認事項

以上